

富良野へ帰ってこないか？

市外へ進学・就職した人の10人に1人は、再び富良野へ戻り就職・転職をしています。

地元を遠く離れて初めて富良野の良さを実感したという声を多く聞く一方、市外に住んでいると富良野の求人情報が手に入りにくいという状況もあります。

「Uターン就職応援特別号」では市内企業34社の求人情報を紹介。

あなたの知識や経験を地元・富良野で活かしませんか？

ファッション誌の仕事に憧れ、カメラマンのアシスタントやライターとして活動していた野口さん。「都会で挫折して、故郷に帰りたくなった人を応援したい」と、帰郷して知った幸せを語ってくれました。

帰郷して見つけた自分らしい幸せの形

10年の都会生活を経てUターン

「人生はサッカーのようなもの。攻撃に失敗して、守備に切り替えるのは恥じゃない。守りに入って得られる幸福もあるんです。」そう語る野口さんの今の仕事は、老人ホームの事務職です。以前は華やかなファッション誌の制作に携わっていました。

札幌の専門学校に進学しマスコミ系のコースで学びながら、在学中にカメラマンのアシスタント兼ライターとして働き始めた野口さん。卒業後は就職せず、アルバイトをしながらフリーランスで活動。多忙で不規則な生活が9年続いた末、ついに体調を崩しマスコミ業から離れざるを得なくなりました。



「360度どこを見渡しても山が見える富良野。他愛ないようで本当に落ち着きます」アウェーを経験したからこそ分かるホームでの幸せです。

当時のアルバイト先だったホテルに声を掛けられ社員になった2年後、異動を命じられ帯広へ。慣れない土地にも、人生の方向性を見失った自分自身にも不安が募るばかりでした。ちょうどその頃、富良野の福祉法人で理事を務める叔父さんから「新規事業の立ち上げのためにパソコンを扱える人を探している。帰ってこないか」と勧められ、Uターンを決意。母一人子一人で育ててくれ、ずっと心配を掛けてきたお母さんも気がかりでした。

人を支える喜びに目覚めて

夢をあきらめ帰郷した野口さんでしたが、利用者さんたちに「ありがとう」と笑顔を向けてもらえる福祉の世界に、新鮮な喜びとやりがいを見い出します。人を支えていると実感できる毎日は、新しい自分を発見させてくれました。

富良野で迎えた人生の大きな転換点ももう一つ。それは中学時代から男女の枠を越えて親友だった女性と結婚したことです。旭川で福祉の仕事をしていた彼女が同じ職場へ転職し、交際を始めて2カ月でプロポーズ。誰よりも気の合う旧友が家族になり、今は小



毎朝9時30分から行われる朝礼では、係ごと、フロアごとに連絡事項を伝達。仲間と助け合い、地域の高齢者を支える。

学生になる娘さんと3人暮らしです。マイホームを構え地域に積極的にに関わり、去年は町内会長も経験しました。

「サッカー用語で“ネガティブトランジション”という言葉があります。攻撃中にボールを奪われたとき、速やかに守備に切り替える動きのことをいいます。やりたかった仕事での挫折、体調不良、意にそぐわぬ転勤など、自分にとって、富良野へ戻ってきた原因そのものは、ネガティブなもの。しかし、結果的には富良野へ戻ってきたことは100%正解でした。」野口さんにとって富良野へ戻るといふ決断は、ネガティブからポジティブへ切り替えるためのまさに「トランジション＝Uターン」でした。

プロフィール



社会福祉法人 富良野あさひ郷 特別養護老人ホーム 北の峯ハイツ
野口 周馬さん (39歳)

富良野高等学校時代はサッカー部で活躍し、生徒会長として制服自由化に取り組んだ経験も。現在は特別養護老人ホームの庶務課で、経理や労務、広報の業務を担当しています。プライベートでは、中富良野町サッカー協会のフットサルチームに所属。幅広い年齢層の仲間と交流しています。

